

町田樹著

『アーティスティックスポーツ  
研究序説——フィギュアスケート  
を基軸とした創造と享受の文  
化論』

武藤 大祐

フィギュアスケート、新体操、アーティスティックスイミングなど、評価基準に「芸術点」を含む競技は少なくない。スポーツと芸術のハイブリッドであるそれらを「アーティスティックスポーツ」(AS)として定義した上で、ASにおける競技者と観客の双方を視野に入れ、「創造と享受の循環を活性化させる」(19)ための理論的基盤を整えようとする野心的な大著である。

第Ⅰ部ではASのハイブリッド性が、美学・芸術学的な観点から検討された後、続く第Ⅱ部では著作権法の見地からASの芸術性が分析される。一見唐突な展開だが、その印象は第Ⅲ部の作品分析を読むことで払拭される。ニジンスキー『牧神の午後』(1912年初演)をふまえたフィギュアスケート作品の中から、著者は、アダム・リッポンが2013～2014年にかけて演じた『牧神の午後』(トム・ディクソン振付)を取り上げ、そこにかなる芸術性・創作性を見出せるかを分析する中で、演目の「著作物性」をめぐる法的な議論の有効性を十分に示している。競技規則によって要請される「任務動作」と、規則的要請から自由な「任意動作」を区別しての分析は本書中の白眉である。さらに第Ⅳ部ではASの観客の行動に焦点を合わせ、スポーツの市場とアートの市場の接点を統計的に検証し、第Ⅴ部では産業構造を論じ、第Ⅵ部はアーカイヴ論にまで及ぶ。

このように本書は包括的な議論を目指したものであり、美学・法学・文化経済学・社会学などの異質な学問領域をテーマに応じて選択しながらASを多角的に理論化している。広範な領域に渡る先行研究の渉猟と、各章の精緻な論の展開が、これまで十分に言語化されてこなかった文化に知的な構造を与えていくプロセスは刺激的である。

著者も指摘するように、ASは「概して舞踊から派生した文化」であり(106)、とりわけバレエやリトミックとはつながりが深い。また近年、舞踊とスポーツの関係がますます見過ごせないものになっていることも事実である。ブレイクダンスが2024年のパリ・オリンピックから正式競技となることは象徴的だが、日本の中学校において必修

化されたダンスは「体育」の枠組に属しているのであり、また各国のテレビ番組でダンスが扱われる際も関心は踊り手の身体能力に集中する傾向がある。つまり、しばしば指摘される通り、ダンスの側においてもまたスポーツ化が顕著に進行しており(歴史的には絶えず繰り返されることだが)、したがって舞踊研究者にとって、舞踊とスポーツの境界領域としてのASはまさにアクチュアリティのあるテーマといえよう。

もちろん本書の議論は、ASと他の競技との差異であり、したがってASにおける芸術性なるものをどう考えるかが焦点となる。それゆえ著者は、例えばディクソン／リッポン版『牧神の午後』についても、きわめて詳細な分析をふまえながら、「勝負を決するというスポーツの文脈を離れてもなお、何度でも味わうことのできる奥深いプログラム」という評価を導き出す(185)。この議論そのものは説得的なのであるが、他方、舞踊研究者の立場としては、ディクソン／リッポン版はニジンスキー版に何を付加したといえるか、という問いに向き合わざるを得ない。つまり舞踊がASになることの価値は何か、さらに煎じ詰めれば、舞踊にとってスポーツ性はどのような意味を持つか、という根源的な問いである。いうまでもなく本書の射程からは外れた問題だが、しかし著者も「最高難度の技や極限の身体運動に挑もうとする緊張感と闘志こそが、牧神の野性を醸し出すうえで有利に働いた」可能性を指摘しているように(181)、舞踊が非日常の身体運動である限り、程度の差こそあれ、そこにスポーツ性は必ず内包されているだろう。だからこそ舞踊からASが「派生」してきたのである。このような論点の先には、舞踊とスポーツの関係を、ASとはまた異なる仕方で考える糸口が隠れているはずである。

(白水社、2020年6月刊行)